

F-3 昭和26年学習指導要領期における「家庭科」の男女共通の教育内容について
の検討
北海道教育大 中屋紀子

目的 昭和27年に施行された「技術・家庭科」成立以来、男女共通の学習内容を殆ど持たなくなつたため、「人間として、家庭生活を営むことのできる能力」の育成を目ざす家庭科教育にあって、不十分な教授形態を余儀なくされてゐる。と云ふ。戦後の一時期の男女共通の学習内容の到達点と課題を歴史的に明らかにすることによつて、今後の男女共修への資料にしたいと考へた。

方法 昭和26年学習指導要領下の期間中の教科書のうち、男女共通の学習内容を分析した。さらに、この期の「職業・家庭科」を履習した当時の男子生徒へのアンケート調査を行った。調査は、函館市内に住む、北海道学芸大学の卒業生である男子教員100名を対象とし、1978年7月～9月、質問紙法で行つた。当時学習した教育内容、家事手法、現在の家庭観や家事負担などを調査した。

結果 ① 北海道は、男女共修を積極的にとり組まなかつた地域の一典型ではあるが、教科書の男女共通学習部分には、広範な内容（衣、食、住生活）が盛り込まれてゐた。② 男子生徒にとつては、家庭内の男働にふれる機会が現在よりも多く、そのために、極めてわずかの分量しか台外してゐなかつた家庭内男働の技術を学ぶこと自身よりも、衣食住生活についての学習を通して、家庭観にたいして与えられた影響が大きい。③ 女子生徒にとつては、「職業分野」の教育内容が重要であつたと考へられる。